

知っク
お金の話



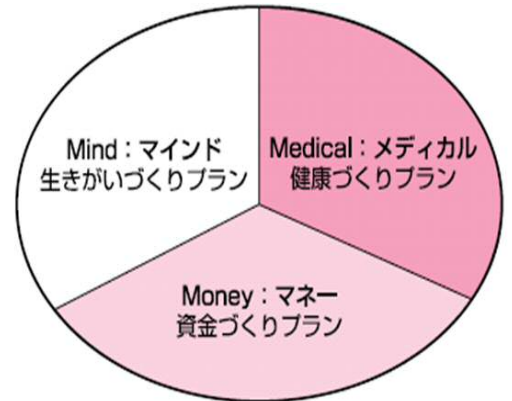
ライフプランってなに??

春が近づき、新生活に向けて準備をされている方もいらっしゃるでしょう。

この時期に、ご自身や家族の将来や夢について考えてみませんか？

今回は、ライフプランについてお話します。

だれもが「家族で旅行に行きたい」「マイホームをもちたい」「老後（セカンドライフ）は田舎でのんびりくらしたい」などの夢を持っているのではないのでしょうか。その夢を実現するためには、次の 3 つの『M』のバランスがとれていることが重要です！



■生きがいづくり (Mind : マインド)

人間としていかに生きていくかのプラン、心のプランです。
人間関係、ライフワーク、教育、資格取得、技能取得など。

■健康づくり (Medical : メディカル)

健康を保つためのプラン、からだのプランです。
医療、食生活、スポーツ、生活習慣など。

■お金（資金）づくり (Money : マネー)

ライフプランの実現性を高めるための、お金のプランです。
収支の管理、資産形成、保障の確保など。

あなたは『わが家のライフプラン』をどのように描いていますか？

この機に、家族で話し合ってみましょう。

知っク
お金の話



お金の今昔物語～今の常識・昔の常識

春は子どもの入学式や進級の時期ですね。子どもの成長を感じつつ、ご自身の幼少時代を少し思い出してみてください。その頃と今とではどんな違いがありますか。

今回は、今と昔の常識の変化について考えてみましょう。

以下に過去（バブル崩壊前）と今（バブル崩壊後）の常識をピックアップしてみました。

《過去の常識》	⇔	《今の常識》
収入は年々増えていくもの	⇔	収入増の見込みは立てられなくなった
土地は値上がりするもの	⇔	土地は値下がりすることもある
保険は貯蓄にもなるもの	⇔	保険の貯蓄性は薄れている
金融機関はつぶれないもの	⇔	金融機関も倒産する



どうですか？

以前と比べると、社会経済情勢（物価水準や税制、金融事情など）や私たちのくらしをとりまく環境（少子高齢化の進行や不況など）が大きく変化しています。過去の常識は、今とは全く異なっていますね。

このように世の中は常に移り変わるものです。したがって、ライフプランは、その時の状況により見直す必要がありますね。

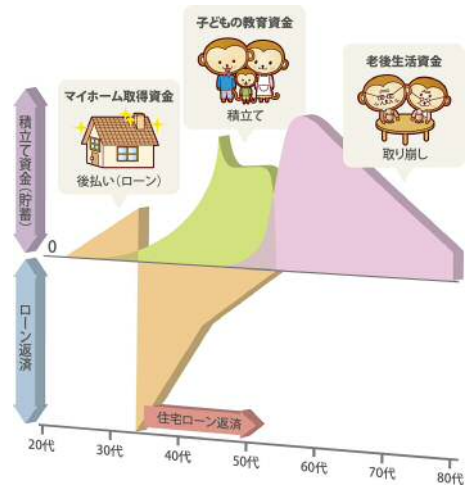
知っク
お金の話



人生の3大資金ってなに？

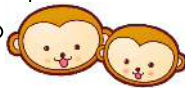
人生には、「住宅取得資金」「子どもの教育資金」「老後（セカンドライフ）の生活資金」とよばれる3大資金があります。数百万円～数千万円という高額な資金をどのようにして準備していくかは誰でも悩むところですね。

一般的に、これらの資金を同時期に準備することは困難です。しかし、それぞれ必要となる時期は異なりますので、資金の性格を考えながら計画的に準備していくことが大切です。お金には貯め時と使い時があります。右の図を参考にしながら自分や家族は今の時期にいるか見極め、貯め時を逃さないようにしましょう。



資金	性格
住宅	後払い
教育	積立て
老後	取り崩し

知っク
お金の話



お金の貯め時はいつ？

年代別にお金の貯め時があります。一般的なライフスタイルをもとに、貯め時について考えてみましょう。

20～30代…貯蓄ができるうちに…！

子どもが生まれるまでの期間は、人生でもっともお金を貯めやすい時期。共働きであれば、しっかり貯蓄をすることも可能です。子どもが生まれると、共働きが困難になり家計収入が減少するケースもあります。共働きを続ける場合でも、保育料などの出費がかさみます。さらに将来に備えて教育資金の積立てをしていく必要があります。

40代…教育資金設計が大きなポイント！

働き盛りの40代は、支出も増加します。負担が大きいのは住宅ローンと子どもの教育費です。教育費は、進路によっても大きく違ってきます。貯蓄で準備できない場合は、奨学金制度や教育ローンを利用する手段もあります。貸与型奨学金は子どもが返済することになりますので、子どもと話し合うことも大切です。

50～60代…住宅ローン返済は退職前に！

40代後半で教育費のピークを迎えた家庭では、子どもの教育費負担が終わる頃です。会社員であれば定年退職まで、自営業者であれば引退までの期間は、貯蓄を増やすチャンスです。この時期を最大限に活用すれば、老後（セカンドライフ）の生活資金を一気に蓄えることも可能です。なお、退職後まで住宅ローン返済が続かないように、ローン返済計画を見直すことも考えておきましょう。

知ってク
お金の話

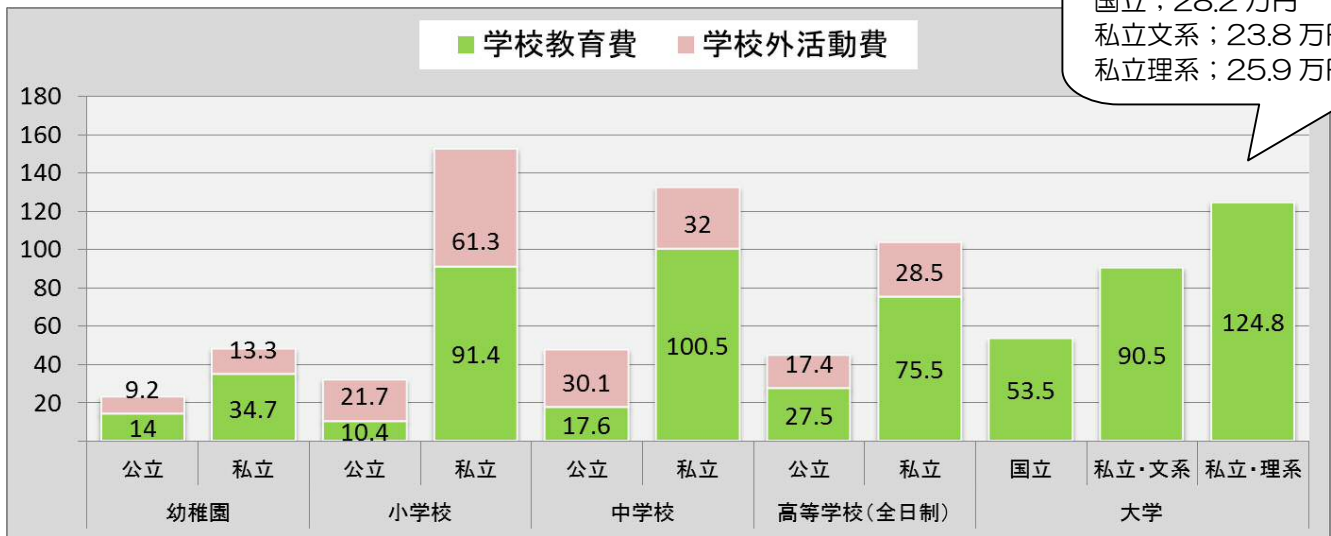


教育費って「いつ」「いくら」くらいかかるの？

教育費が「いつ」かかるかは、子どもが生まれると同時にほぼ確定しますが、「いくら」かかるかは子どもの進路プランによって個人差があります。進学先が国公立か私立か、文系・理系・医科歯科系か、さらに自宅から通学するか下宿をするかなどもによっても、教育費は大きく変わってきます。

■ 幼稚園から大学までの学校教育費・幼稚園から高校までの学校外活動費のめやす
(子ども 1 人あたりの年額/単位：万円)

大学の入学金が別途必要になります。
国立；28.2 万円
私立文系；23.8 万円
私立理系；25.9 万円



※文部科学省「平成 28 年度 子供の学習費調査結果」

私立大学は文部科学省「私立大学等の平成 27 年入学者に係る学生給付金等調査結果」より入学金を差し引いた金額。

国立大学は平成 30 年度 (標準額)

教育費はどのように準備したらよいのでしょうか。一般的に、18 歳での大学進学までに『積立貯蓄』する方が多いようです。積立貯蓄だけでは資金が不足する場合、奨学金制度や教育ローンを利用するという手段もあります。ただし奨学金といっても貸与型が一般的であり、この場合は卒業後に返還しなければならないため、実質的にはローンと同じです。検討の際は子どもと相談のうえで、借りられる金額と同様に「返還していく金額」についても事前に見通しを立てておきましょう。



知っク お金の話



教育資金は保険で貯まる？

もうすぐゴールデンウィーク！家族旅行や帰省等イベントの計画をされているご家庭もあると思います。こどもの日も近づく中、少し教育資金について考えてみましょう。

子どもの保障として思いつくのは「学資保険」や「こども保険」。これらは、入学時の祝金や満期金を受け取ることができ、契約者である親が死亡した場合、それ以後の保険料負担も不要になる、という保険です。これまでは貯蓄性の高さが魅力でしたが、最近では高い利率での運用が難しく保険料も高くなっています。加入されている方は、下記の計算式で元本割れしないかチェックしてみましょう。

「毎月の保険料」		「支払う年数」		「支払う保険料の総額」	
円	×12ヶ月×	年	=	円	↑「満期金の総額」と比較しよう。



あわせて、親が万が一のときの教育資金の保障として考えている場合は、他の生命保障と重複して過剰になっていないかもチェックしてみましょう。これから加入する方は、考えている加入目的を考え、契約内容が希望に沿っているかを検討することが重要です。

知っク お金の話



家賃を払うよりマイホームを買ったほうがいい？

ゴールデンウィークはワクワクしますが、終わってしまうと少しさみしいですね。マイホームの購入も、どんな家に住もうかな～とワクワクする気持ちと同時に、費用を考えるといろいろ悩んでしまいますよね。

そもそも、「マイホーム」と「賃貸」の、どちらを選ぶかも悩むところです。

日本人は持ち家志向が根強く、多くの方が「いつかはマイホーム」と思っているようです。

しかし、必ずしもマイホームの方がよいとはいきれないこともあります。

例えば、買ったときは良くて、仕事や学校の都合で別の場所に移りたくなったとき、持ち家だと売却や貸家にするなど手続きが大変です。また、家を買った場合の一生の住居費を計算すると、賃貸とあまり変わらないこともあります。

また、お子さんにとってみれば「親が亡くなった後に家だけが残って困った」ということもあります。

マイホームは、自分や家族が今後どのようにくらしたいのか、そのために住宅の購入が必要なのかどうかをじっくり検討してから決めたいものです。



知っく お金の話



住宅ローン、いくら借ればいいのか？

さて今回は、住宅ローンについて考えてみましょう。

人生最大の借入金とも言える住宅ローン。「どのくらい借りても大丈夫なのかな？」と不安になりますよね。ローンを借りる時は「借りられる額」ではなく「返せる額」を前提にするとよいでしょう。「手取り月収」を目安に考えると「返せる額」が想定しやすいですね。また住宅購入金額だけでなく、頭金や諸経費のための自己資金を準備することも大切です。

■自己資金の目安 「物件価格の25～30%（頭金20%；諸経費5～10%）」

できるだけ自己資金は多めにし、定年前にローン返済を終わらせる計画を立てると安心です。

次の式を参考に、ゆとりあるローン返済計画にしましょう。

■無理のないローン返済年額（年単位で計算）

$$= \text{現在の家賃} + \text{節約できるお金} + \text{住宅のために積立しているお金} - \text{ローン以外の住居費（※）}$$

※ローン以外の住居費とは固定資産税や駐車場代など。マンションの場合はさらに管理費や修繕積立金などがあります。



知っく お金の話



バリアフリーや省エネ改修工事の住宅ローン控除

楽しかったゴールデンウィーク。家族のイベントで予想外の大出費！なんてことはありませんか。

ところで、住宅ローン等を利用して住宅をバリアフリー改修や省エネ改修した場合、一定の金額を所得税から控除できることをご存知ですか？

近々リフォームの予定をしている方は、事前に確認してみましょう。

ただし、いずれの場合も納めた所得税を超えては、税金は戻りません。

■特定増改築等に係る住宅借入金等特別控除の内容

税額控除率	①特定改修工事費用部分（250万円限度）× $\boxed{2\%}$ （バリアフリー、省エネ、多世帯同居改修に直接要した費用） ②{ローンの年末残高（1,000万円限度）－①の工事費用}× $\boxed{1\%}$
控除期間	居住開始から最長5年間
ローンの償還期間	5年以上が対象
工事費用	50万円を超えること（補助金等の額を除く）

*上記以外にも条件があります。詳しくは国税庁ホームページでご確認ください。

*バリアフリー・省エネ改修工事に係る控除は、従来の住宅ローン控除との選択制になります。



知っク お金の話



住宅ローンは借いた後も見直しを！～借り換え編

もうすぐ梅雨ですね。青・紫・赤紫のいとりどりのあじさいがきれいに咲く季節。さて、夏のボーナスを間近に控えた今回は、住宅ローンについて考えてみましょう。



住宅ローンは借いた後に返済総額を減らすことが可能です。その方法の一つが『借り換え』です。『借り換え』とは、高金利時代に借りたローンを低い利率のローンに借り換えし、支払利息を軽減することです。しくみとしては、新たなローンを組んで、その借入金で先のローンを返すかたちになります。

『借り換え』を考えるポイントは次の5つです。

- ①ローン残高が500万円以上
- ②残りの返済期間が10年以上
- ③新たなローンとの金利差が1%以上
- ④事務手数料が低くおさえられる
- ⑤手続きの利便性（インターネットで手続可能かどうか）



ただし、借り換えローンを利用する場合、新しくローンを組むための諸経費（保証料や登記費用など）がかかることもありますので、それらも含めて検討しましょう。

知っク お金の話



住宅ローンは借いた後も見直しを！～繰り上げ返済編

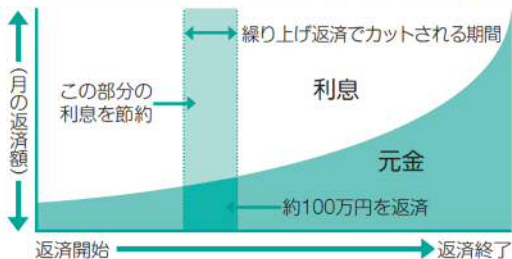
住宅ローンがある方は、ボーナスを利用して繰り上げ返済をするのも効果的です。

住宅ローンの見直しの一つ『繰り上げ返済』には、「期間短縮型」と「返済額軽減型」があります。それぞれのしくみは下記の通りですが、『繰り上げ返済』は早い時期に実行するほど効果があります。ただし、繰り上げ返済後に手元の貯蓄がなくならないように注意しましょう。

〈計算例〉返済開始後5年で約100万円を繰り上げ返済する場合（2,000万円を35年返済、金利3%で借り入れ）

期間短縮型

2年6ヶ月返済期間短縮。総返済額は約133万円減額



返済額軽減型

毎月の返済額4,216円減額。総返済額は約52万円減額。



※ローンを組んでいる金融機関・商品によって返済にかかる手数料が異なります。事前にご確認ください。

知っク お金の話



長寿国ニッポン！セカンドライフが心配…

長寿国といわれて久しい日本。平成 28 年簡易生命表（厚生労働省調べ）によると、男性の平均寿命は 80.98 年、女性の平均寿命は 87.14 年。平均寿命が男女とも延びているなかで、セカンドライフに不安を感じている方も多いのではないのでしょうか。

セカンドライフの生活費がどのくらい必要なのかは、くらしのスタイルによって大きく変わってきます。会社を定年退職しても、再雇用や別の職場で働いたり、開業、田舎暮らし、海外移住など、どんなセカンドライフプランを持っているのかで必要な生活費は大きく変わってきます。まず「どのようにくらしたいか」、そしてそれに合わせてどのように『セカンドライフの備え』をするか、現役世代のうちから考えておきたいものですね。



知っク お金の話



長寿国ニッポン！セカンドライフの生活費、いくらかかるの？

定年退職したら、仕事をやめたら、その後の生活費としていくらくらい貯蓄があればいいか、気になりますよね。

セカンドライフの生活費を大きく分けると、食費・社会保険料・住居維持費・交際娯楽費・その他（水道光熱費等）の 5 種類になります。このうち、家族人数によって変わるのは食費です。60 歳過ぎに夫婦 2 人暮らしとなった場合の生活費は子どもと同居時の 7 割程度、さらに夫婦どちらかが亡くなり 1 人暮らしになった場合は、2 人暮らしの時の 7 割程度が目安です。

■セカンドライフの生活費

例) 夫 60 歳から夫婦 2 人で、月に平均 25 万円、1 人暮らしはその 7 割と仮定します。

【モデルケース】

夫：60 歳…余命 23 年と仮定

妻：55 歳…余命 33 年と仮定

①夫婦 2 人の毎月の生活費 25 万円

②妻 1 人の毎月の生活費 17 万円

①25 万円×12 ヶ月×23 年=6,900 万円

②17 万円×12 ヶ月×10 年=2,040 万円

合計 8,940 万円



これだけの金額を貯めるなんてとても無理！と思うかもしれませんが、しかし、公的年金で補える分もあります。「ねんきん定期便を見る」「年金事務所へ問い合わせる」「日本年金機構のホームページにある『ねんきんネット』で年金受給額の試算を行う」などの方法で、自分の年金額を把握し、改めてセカンドライフプランを考えてみましょう。